

## 第94回緩和ケアチーム抄読会

2011年8月31日

担当: 朴 順禮

### *Parents' experiences of a Family Support Program when a parent has incurable cancer.*

Kari E abugge ,Solvi Helseth and Philip Darbyshire

Journal of Clinical Nursing,18, 3480-3488 ,2009

#### <目的>

Family Support Programは、両親のいずれかが治療困難ながんを有するときに、子どもと親をサポートするために作成された。我々は親のコーピングをサポートし、家族が共に協力することを援助するために家族ベースのアプローチを選択した。その介入を経験した両親からの評価を行う。

#### <背景>

- ・がんは、通常若い家族にとっては初めての経験である。ほとんどの場合、親の深刻な疾患と差し迫った死についての情報やサポートに対して、子どもに必要な知識を両親は知らない。
- ・がんのような致命的な疾患に直面する親は、病気に対する不安や苦痛、抑うつや他の情緒的障害を経験することは驚くべきことではなく、そのことは、彼らの育児と子どもとの関係に影響を与える。そのためがんに罹患した親の子どもは、心因性の障害と問題を生じる危険性が高い。
- ・子どもの不安のレベルは、親の病気についてどのように話されているか、コミュニケーションの質と率直性に関係している。
- ・病状が不安定で治療不可能な場合、子どもが親のがんに対処することは特に難しく、親は、彼らを怖がらせることや希望を奪われることが怖いので、がんについて子どもに話すことが困難である。
- ・けれども個々の患者だけでなく、その家族のためにケアすることは大切であるが、実際に介入しているのはあまり多くない。そのため両親のいずれかが治療困難ながんを有するときに、子どもと親をサポートするために作成された介入プログラムを経験した両親からその評価を報告する。

#### <Family Support Programとは>

- ・がんにより死に直面している母親や父親と子供のニーズに関する研究から開発された。
- ・Family Support Programは、対象者の目標の設定、サポート理論、家族ミーティングの記録、子どもと親の間でコミュニケーションと理解を高めるための具体的な方法といった構成でマニュアル化されている。

・また、異なる年齢層の発達段階に合わせたサポートや子どもの理解を促すための本や映像を活用する。

#### ○Family Support Programの目的

自分の子どもに関わる課題を克服し、家族の回復力をサポートする

病気に対して話すことを支援する

最良な方法で彼らの子どものニーズを理解するためのサポートを行う

将来の計画を援助する

#### ○Family Support Programのアプローチと運用

- ・ノルウェーの3つの病院で実施
- ・治癒困難であると告知を受けた患者とパートナー、(離婚したパートナーも含む)、5歳—18歳までの患者の子どもを対象とした。最終的にだれが参加するかは患者が決定する。
- ・がん治療を専門に行っている(看護師、社会学者、芸術セラピスト)6名と、各病院で働いている2名がFamily Support Programを実施
- ・プログラムは4回+1回(death' meeting)で構成され、6週間にわたり実施された。

#### <研究デザイン>

Family Support Programに参加した親の経験に焦点を当てた詳細なインタビューによる質的研究

#### <方法>

- ・対象者：不治のがん患者と5歳—18歳の子供がいるパートナー、または元パートナー
- ・対象患者11例中1例は拒否、プログラムの基準を満たした6例の患者、その子ども12名と家族が参加、全体で13人の親(6名の父と7名の母)が面接を受けた (Table 1)。
- ・患者の平均年齢42歳、発症後3ヶ月から8年にわたっていた。
- ・面接はプログラムが終了した6週間後に行われた。
- ・面接時間は60—90分で録音された。
- ・面接内容：Family Support Programに参加した理由、プログラムはニーズを満たしたか、プログラムの改善点など

#### <結果>

- ・親たちはFamily Support Programにより、子どもの考えに関心を持ってより大きな洞察を得ることができ、彼らの日常生活にどのような影響を及ぼしたか述べた。
- ・また、親と子の不一致を軽減し、家族の状況についてより率直に話すことができ、子どものコーピングをどのようにサポートするか示された。
- ・親の病気を話すことは、子どもにとってトラウマになることを知っており、間違った方法や、子どもの異なった年齢とニーズを考慮せず親の病気について話すことで、子どもに危害が及ぶのではないかと心配していた。

- ・ Family Support Programは、子どもに親の病気について話すことに役立った。
- ・プロジェクトメンバーが、子どもからの答えにくい質問に介入したことや、パートナーと子どもの間において緩衝材の役割を果たしてくれたことは有効な方法であった。
- ・子どもにとって利用可能な重要な人物やサポートを確認することで自分自身(両親)が慰められた。
- ・終末期における計画を立てるにあたり役に立った。

#### <考察>

- ・本研究結果は、国際的に実施された類似の研究結果に一致し、がんに罹患した親とその子どもは援助とサポートを望んでいた。
- ・親は終末期から将来を鑑みて死について話すことに困難があること、個々の家族の懸念を扱うことは不可欠であること、疾患の状況を理解し、家族の強みを引き出し活用することは子どもを安心させることにつながる重要な方法であることが示唆された。

#### <感想>

- ・がんに罹患した患者とその家族、特に幼い子どもを抱える家族と子どもに対する援助やサポートは、大変重要なことであるが、日本においてはほとんど行われていないのが現状である。がん患者のみならず、家族を含めたケアができるよう欧米で行われているサポートプログラムを参考に、日本に合わせたプログラムの発展とそれが実施可能なシステムを期待したい。

#### <参考プログラムなど>

##### 親ががんである場合のサポートプログラム

- ・ CLIMB®プログラム(Children's Lives Include Moments of Bravery)

<http://www.childrenstreehousefdn.org/ourroll1.html>

日本での研究 Hope Tree : [http://www.hope-tree.jp/hope\\_tree/](http://www.hope-tree.jp/hope_tree/)

→ 「がんを持つ親の子どもへのサポートグループに関する研究」 資料参照

[http://www.luke.or.jp/about/approach/pdf/ra13/research\\_activities\\_13\\_12.pdf](http://www.luke.or.jp/about/approach/pdf/ra13/research_activities_13_12.pdf)

- ・ MD Anderson cancer center

Kids Need Information Too : Knit ニットプログラム